
講義中は

てんのすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
講義中は

【Nコード】
N6187T

【作者名】
てんのすけ

【あらすじ】
とある学生の講義の様子をかきました。

(前書き)

短めですが、よろしくお願いします。

「と、言う訳であるからして、新教育基本法は旧教育基本法から……」

オムニバス形式の教育学系の一般教養講義は単位が取りやすいとのことで、割と人気の講義だ。

そのため、普通の講義が行われる講義室よりも大きな講義室が利用されている。

大きな講義室に一人の講師と多くの学生。

講師はしゃべることに集中しているのだから、死角が非常に多い。それをいいことに後ろの席に陣取った学生のほとんどは、夢の世界へ羽ばたいている。

大方、サークルの飲み会、バイト疲れによる弊害だろう。

まあ、その他の理由が挙げられるならば、この講義が非常につまらないということも挙げられるだろうが。

俺は、そんな学生の中でも比較的後ろの席に陣取りつつも、真面目に受講していた。

別にこの講師の講義が特別好きなわけでもないし、むしろ昨日は寝るのが夜明け前だったから、正直眠い。

それに、真面目といっても頭の片隅には隣で寄りかかって眠っている彼女のことを常に考えていた。

隣から伝わってくる女性特有の柔らかさと、甘い香り。

それがダイレクトに俺の五感に突き刺さっていく。

だんだん、講師のしゃべっていることが頭に入らなくなってきた。「はあ……」

思わずため息をついてしまう。

俺は頭をガシガシとかきながら、彼女に夢中すぎる自分に呆れてしまった。

どうして、俺はこんなにも有希ゆきが好きなんだろう。

最近、ようやく付き合い始めた有希。

そんな有希は、現在、ノートも教科書も開かず、俺の肩を枕に静かに寝息を立てていた。

規則的に聞こえてくる寝息、さらさらとした黒の艶やかな長い髪が俺の顔にかすかに当たる感触、その髪から香るシャンプーの匂い、昨日買ったばかりだ、とサイズが残念な胸を張って喋っていたセーターから確かに伝わってくる有希の体温。

有希に集中すると、より一層講義内容が頭から飛んでいってしまう。

講義中だ、ということを忘れて有希を抱きしめてしまいたい。そんな衝動にも駆られる。

寝坊介の彼女を起こそうとするたびに、俺はいつもよからぬことを考える自分と戦っている。

ついに俺は自分の衝動を誤魔化すように有希の肩をゆすった。

「有希、大事なことだから起きろ。最後に感想を書かなきゃ出席は認められないみたいなんだよ、この先生の授業のときは」

「ふえ〜？ 周ちゃん聞いといてよく。まだ、眠い〜」

理性で何とか高ぶる感情を抑えて、声を出してみたが、有希はまだおねむらしい。

有希は眠たそうに語尾を伸ばして返事する。

だが、それは俺にとっては非常にまずかったりする。

有希は胸こそ残念だが、スタイルは良かったりするし、人前はクールなキャラを装っていたりするので、今みたいに可愛い感じな有希は、余計可愛く見える。

「はぁ、感想書けなくて欠席扱いになっても知らないからな」

口ではそういつつも、講義に集中し直そうと気を引きしめようとする俺。

そんな時だった。

「そんなこと言ってもさ。私の大好きな周ちゃんだから。しっかり聞いて私に教えてくれるんだよね？」

有希は眠たそうにしつつも、俺に寄りかかりながら微笑んだ。

俺は心でため息をつく。

ああ、いつものパターンだなあ、と。

「ああ。でも、勘違いするなよ？　俺は彼女が単位を落としそうになるのを防ぐために……」

「わかってるよ。私の彼氏はよく尽くすいい彼氏だねえ」

それでも、何か釈然としないところがあって強がる俺に、余裕の表情の有希。

「いつもありがとね、周介」

「え……？」

いつも『周ちゃん』と俺を呼ぶ有希が、名前で呼ぶのは珍しい。だから、俺は驚きながら、肩で満足そうに眼をつぶっている有希を見た。

「すう………」

有希はすでに再び夢の世界へ舞い戻ったようだった。

なんだよ、有希。たまに名前で呼ぶなよ。すげえ驚くじゃねえか。

「お前だって、いい彼女だよ」

俺は本音をすごい小さい声で呟き、講義をまじめに聞くため、相変わらず興味がそそられないことを延々と話し続ける講師に向き直った。

でも、何だろう。

有希のニヤけた寝顔は。

コイツ、まさか聞いてたんじゃ……。

(後書き)

感想、ご意見、ご指摘を頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6187t/>

講義中は

2011年10月8日10時40分発行